

Mon Nara



Numéro275 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 MAI-JUIN. 2016 5-6 月合併号

ルノワールの映画『ゲームの規則』の尽きせぬ魅力

「第130回フランス・アラカルト」開催 (5/29)

ジャン・ルノワールの映画『ゲームの規則』(La Règle du jeu, 1939) は、世界映画史上、高い評価を得ている作品ですが、内容があまりに豊かすぎて、解説はなかなか至難の技かもしれません。ゲストにお迎えした檜原恒一郎さん(奈良シネクラブ代表、当協会元理事)は、この「傑作中の傑作」とも言われる作品を、わかり易く聴衆に理解してもらうために、何をどのように語ればいいのか、直前まで悩みながら推敲を重ねて原稿を用意し、この映画への熱き想いを語ってくださいました。

今年1月の山本邦彦奈良女子大学名誉教授によるモリエールの『タルチュフ』、3月の南城守理事の「画家のルノワール」についてのアラカルトにも言及され、フランスの芸術・文化へのリスペクトを表明されつつ、檜原さん自身1970年代はじめに3年間ほどパリに滞在した折、現在のオルセー美術館ではなくジユドボーム美術館で、父ルノワールの絵画に親しまれた挿話も紹介されました。以下は、檜原さんの解説の一部です。

『ゲームの規則』は、アルフレッド・ミュッセの戯曲『マリアンヌの気紛れ』(Les caprices de Marianne, 1833) とボーマルシェの『フィガロの結婚』(Le Mariage de Figaro, 1784) に想を得た作品で、演劇的要素がふんだんに盛り込まれていますが、ルノワールは原作を作りかえて、自らの人生観や豊かな感性を持った自由を希求する人物を中心に再構成し、大らかな艶笑喜劇に仕立てあげています。

パリの社交界で有名なラ・シュネイ侯爵夫妻は、それぞれの愛人や友人たちを地方の別荘に招き、集まった貴族と館の使用人たちが、狩猟や仮装パーティに興じる中で、三角(時には四角五角)関係の男女の恋愛ドラマが展開します。森番シュマシエールの嫉妬が引き金で、屋敷はどんちゃん騒ぎとなり、貴族とブルジョアがお互いの偽善を暴きあい、殴りあったかと思うと変に和解したり、何が何だか判らないままに、最後に思いがけない悲劇が起こります。館の主である侯爵が、貴族とブルジョワの秩序を守るための結末をつけて、劇は幕を閉じます。

映画のタイトルでもある「ゲームの規則」とは一体何か? つねに考えさせながら、この作品では様々な主題や視点が浮かび上がっては消えていきます。ある人物に感情移入すると突然裏切られ、ある人物のいい加減さに愛想つきかけると突然真実を語り始めたり。物事について固定した見方をすることはできず、プリズムが少し角度を変えるたびに人生諸相が変わっていく不思議な面白さが、この映画の心髄かもしれません。理性や訳知りを超えるルノワールの人生の実存に迫るこうした作家態度は、人物たちをあるがままに描き出そうとするもので、父オーギュストが自然の樹の葉を一枚一枚描こうとする態度にならったものでもあります。画面に深さのある映像構成を探究し、登場人物たちを一度に捉えて、多層的な映像を作りあげる画面作りが、こうした演出を可能にしています。森での「狩猟」場面は、独立したフィルムとして見て素晴らしい出来栄で、自然のリアルな描写であるとともに、様々な暗示を投げかけます。

ここでは檜原さんの解説のごく一部しか紹介できず残念ですが、私にとって『ゲームの規則』は、目の前で動いているものを単純に隅から隅まで見ることの原始的な映画の愉しみを味わわせてくれる作品、と同時に、何世紀にもわたって築かれてきたフランス文化・芸術・精神の産物であることを思わずにはいられない作品です。(浅井直子)

ルノワールの総ての作品が素晴らしい! 檜原 恒一郎 (ひわら こういちろう)

『ゲームの規則』をご覧いただきました。第二次大戦直前の仏蘭西の貴族とブルジョワの上流社会とそこに仕える召使達が織りなす恋の葛藤を艶笑喜劇の形を採って人生の虚実を抉りだし、従来の映像演出の常識を破る多層的な画面構成を駆使して新しい演出様式を創造した傑作です。何度観ても新しい視点を観客に与える味わい深い作品です。ジャン・ルノワールは、1925年以来無声映画時代から映画が音を得た'30年代、米国への亡命期を経て帰仏するまで三十数本の映画を作りました。彼は印象派の巨匠オーギュストの息子、父が絵を通じて語りかけた市井の人々の生活と愛を大らかに自由に表現する人間への讃歌、人と自然の美しい親和、そして豊かな色彩感覚を正統に継承し映画というメチエに実現した作家です。彼の総ての作品が素晴らしいと私は思います。またご紹介できる機会があればと願っています。



フランス文学の庭から <45> 名句の花束

三野博司（会長）

Quand finira la comédie ? (2)

いつ終わるんですか、この芝居は？

(マリヴォー『愛と偶然の戯れ』 1730 年)

前号でシルビアの台詞を紹介しました。「Quand finira la comédie ? いつ終わるんですか、この芝居は？」ところが、父親は簡単に終わらせようとはしません。彼にはこの芝居が最後には良い結果をもたらすという確信があるようです。双方が変装して化かし合っているわけですが、このゲームでは耐えきれなくなって先に正体を明かしたほうが負けなのです。父親はそのことも十分にわきまえていて、娘にじっと我慢させて、相手が降参するのを待たせるのです。

この変装をいっそう複雑にしているのが、マリヴォー風文体 *marivaudage* と呼ばれる陰影に富む微妙な台詞です。召使いに変装したシルヴィアは召使として語っているのか、あるいは自分の本心を漏らしてしまっているのかあいまいです。そこへ傍白が加わって、台詞が示す心理の層はさらに複雑になります。モリエールの芝居のような古典主義的な簡明さをもたないために、登場人物の解釈也多義的でニュアンスとふくらみをもつものとなります。

マリヴォーの有名なことばがあります。「私は恋心が身をひそめていそうな穴を注意深く見張った。私の喜劇の一つ一つは、そういう穴から恋を引き出して見せることにある」。このような微細な心理の綾を分析することにかけて、彼は卓越した技量を見せました。しかし 18 世紀は哲学思想の時代でもあるので、たとえばヴォルテールのように批判する人もあらわれました。「私はむしろ彼にさまざまな感情をあまりにも細かく分析し、時には人心の大道からそれて、いささか曲がりくねった小道を取ったことを咎める」。果たして人心の大道からそれているのか、このような微細こそが人心ではないか、という気がします。

『愛と偶然の戯れ』は、冒頭で、男女双方において主人と召使が変装して入れ替わるという手法を用いていますが、その 5 年前、1725 年にマリヴォーは同じような身分転倒の芝居『奴隷の島』を書いています。島というのは孤立した小宇宙であり、独自の文化・文明をもっていることがあります。そこへ外界からヨーロッパ人がやってきて、奇想天外な体験をするという「島もの」は、当時流行したようです。『奴隷の島』には主人と召使の身分が逆転するという規則があり、そこへ漂着した 2 組の主人と召使の喜劇が繰り広げられます。ただし、身分が入れ替わっても、最後にもとに戻るところは『愛と偶然の戯れ』と同じです。この半世紀後に勃発するフランス革命のように、実際に階級転覆が起こるわけではありません。

『奴隷の島』はコメディ・フランセーズではなく、ずいぶん昔にモンパルナスの小劇場で見たことがあります。劇場の入り口で料金を払うとき、こんなやりとりをしたのを覚えています。「学生ですか？—いいえ」、「失業者ですか？—いいえ」、「大家族ですか？—いいえ」、「じゃあ正規料金で、40 フランです」。ユーロではなく、まだフランの時代でした。いまでは学生と間違われることはないのだからこんな質問は受けませんが、かといって窓口で「失業者ですか」とたずねられたのはこのときだけです。「大家族ですか」と質問されたことも、他には一度もありません。フランスの鉄道 SNCF では、3 人以上の子どもを連れて乗車するときは大家族 *famille nombreuse* 割引になるようですが、私が劇場に行ったときはひとりでした。この劇場のウェブサイトを見ると、学割、失業者割引は現在もあるようですが、大家族割引料金はありません。いつまであったのでしょうか。



Nos amis francophones à Nara (6) Pierre Silvestri (ピエール・シルヴェストリ) さん

Aux huit ans que j'ai passés à Nara ont succédé 4 années à Paris. Le recul m'a fait penser différemment à la première capitale historique du Japon. De tout ce que j'y ai vécu, la culture du riz reste l'expérience la plus inoubliable. Durant ma vie japonaise, j'ai œuvré à sa production et je connais vraiment bien chaque étape du processus de fabrication de cette céréale tant consommée en Asie.

Le kanji signifiant « homme » (男) résulte de la combinaison de deux autres : « force » (力) et « rizièrre » (田). Il me semble que le fait de travailler dans les champs de riz m'a permis de poursuivre mon accomplissement en tant que personne humaine de sexe masculin.

Plus généralement, Nara m'a marqué et n'en finit pas de m'habiter. J'ai réalisé un court-métrage intitulé *Nara mon amour* qui résume ce que cette cité représente dans ma vie. Nara est comme une amante qui m'accompagne partout où je suis et où je vais.

Beaucoup de gens venant au Japon visitent Nara mais n'y restent pas. J'ai eu cette chance inestimable, celle de respirer des parfums subtils, de nourrir ma vue de paysages bouleversants, d'écouter la richesse des sons propres à chaque saison, de goûter des spécialités délicieuses, et bien entendu, de rencontrer des âmes qui compteront jusqu'à mon dernier souffle.

奈良で8年暮らした後パリに来て4年になりますが、この時間の隔たりが私に日本の最初の都について異なる見方をもたらしました。私が奈良で経験したことのなかで、もっとも忘れがたいのは米の栽培です。日本で生活している間はずっと、米の生産に携わっていたので、この穀物の生産過程のすべての段階によく通じています。

「男」という漢字は「力」と「田」の漢字の組み合わせからできていますが、田圃で働いたことが、男である人間としての私に成長をもたらしてくれたように思います。

奈良は私の記憶に焼きついて、いつまでも内部に宿り続けています。私は「奈良、我が愛」という題の短篇映画を作りました。映画は、この都市が私の人生の中で占めているものを要約しています。奈良は、私のいる所や行く所のどこにでもついてきてくれる恋人のような存在です。

来日する人々の多くは奈良を訪れますが、そこにとどまる人はほとんどいません。私にはその貴重な機会がありました。微細な香りを吸い込み、心揺さぶる風景で目を肥やし、季節ごとに特有の音を聞き、おいしい特産物を味わい、そして大切な人たちと出会った、貴重な機会です。



「柏木隆雄文芸講演会」(三重日仏協会・放送大学三重学習センター共催) 参加報告

三重日仏協会の人気イベント「柏木隆雄文芸講演会」は、数年前から放送大学三重学習センターとの共催となり、ますます快調、今年で16回目を迎えて、4月10日(日)に開催されました。今年は当協会から、私と浅井事務局長の二人が三重へと出向きました。

三つの縁によってこの講演会と結ばれている私が柏木隆雄さんに「参加する」とメールを送ったのは、今年の1月、まだ日程も公表されず、演題も決まっていない時期でした。三つの縁とは、旧知の柏木隆雄先生、日仏協会、そして放送大学との縁です。2014年6月、私が奈良日仏協会会長に就任してすぐ、創立20周年記念式典を開催しましたが、柏木隆雄先生(大手前大学学長・日本フランス語フランス文学会会長)、そして矢野隆嗣理事を始めとする三重日仏協会の方々にご出席いただきました。今回はその返礼の意味もあり、また放送大学三重学習センターを訪問し、上野所長や事務長と情報交換するという目的も兼ねていました。

仏文学者の枠に収まらない柏木さんですが、今回の演題は「蘇る江戸文化」。1914年刊行の『絵入り日本 Le Japon illustré』の著者であるフェリシアン・シャレー、およびそれに協力したエマニュエル・トロンコワの業績を紹介し、とりわけトロンコワがいかにもすぐれた日本美術の理解者であったかを説明されました。なお、柏木隆雄・小林宜之編集による『日仏文学・美術の交流：トロンコワ・コレクションとその周辺』(思文閣出版)が大手前大学比較文化研究叢書として刊行されています。

講演会後の懇親会は、パリの街角にもありそうな雰囲気のレストランで、ここでも疲れを知らない宴会好きの柏木さんが音頭を取って会を盛り上げ、シェフが腕を振った本格料理が次々と繰り出されました。このような楽しい会に招待いただいた三重日仏協会の方々に感謝いたします。(会長 三野博司)



フランス語で読む日本古典 : 「源氏物語」 第九帖 葵 (あおい)

平安時代後期(藤原時代)、それは現代を含めても京都市民にとって最も幸福な時代であったかも知れません。一年の内でも取りわけ旧暦四月は新緑と葵の白花や藤で溢れる「賀茂祭」が祭行され華やかさのクライマックスを迎えます。この祭が今の「葵祭」なのです。源氏物語でも光源氏は高官としてその行列に参加し、正室の葵の上も最前列で見物しました。そこへ昔からの愛人である六条御息所(みやすどころ)もお忍びで牛車で見物に押しかけます。そこで見物場所の取り合いが始まります。

(中浦 東洋司)



[上] 本列の牛車 [右上] 二葉葵:御簾(す)をはじめ、牛車、勅使や供奉者の衣冠、牛馬にいたるまですべてに飾り葵の小枝が付けられる。[右下] 社頭の儀式

その供人は、「この御車は決してそのように押し退けなどすべき御車ではありません」と強く言って、手も触れさせませんでしたが、葵の上方の供人は、「それくらいの者に、とやかく言わせるな。」「源氏の大將殿の家の権力を頼りに思っているのだろう」等と言ひ合いになりました。酔った供人たちを止めることは誰にもできません。葵の上の供人の中には、源氏の大將家の人も混じっていましたので、御息所をお気の毒に思いながらも、その事に気遣うのも煩わしいことなので、知らん顔をしていました。遂に、葵の上方は、御車を前に立て並べてしまい、御息所の御車は、副車(お供の女房の車)の更に奥に押しやられて、祭りの行列など何も見えません。車止めの台などもみな押し折られて、その辺の庶民の車の支えに寄せかけてあるので、この上なく体裁が悪く、御息所は見物をしないで、すぐ帰ろうとされましたけれど、通り出るような隙間さえ無いのです。御息所は、ご不満は勿論の事、この様なお忍びを知られてしまった事が悔しくなりません。

— Ces chars-ci ne sont pas de ceux que l'on puisse repousser sans façons ! dirent les valets d'un ton menaçant, et ils ne permirent pas que l'on y touchât.

La querelle qui s'éleva entre jeunes gens, qui de part et d'autre avaient trop bu, ne put être apaisée. Les domestiques d'âge mûr avaient beau les inciter au calme, ils ne purent les arrêter. Or, ces chars étaient ceux de la Dame de la Chambre, mère de la Prêtresse d'Isé, qui, dans l'espoir de se divertir des soucis qui troublaient son esprit, était venue là en discret équipage. Encore qu'ils feignent de l'ignorer, ils l'avaient bien reconnue.

— Ne laissons point ces maraudeurs se moquer de la sorte ! Sans doute se targuent-ils de la protection de Monseigneur le Général ! disaient-ils.

Les gens de ce dernier, qui se trouvaient mêlés à l'affaire, encore qu'ils en fussent fâchés pour cette dame, prenaient des airs indifférents, car ils craignaient des ennuis s'ils intervenaient. Pour finir, les chars furent rangés en bonne place et ceux de la rivale repoussés derrière les chars des suivantes, de sorte qu'elle ne voyait plus rien. Cela était certes irritant, mais ce n'eût rien été si, reconnue en si piteux équipage, elle n'avait été délibérément abreuvée d'insultes.

「中将姫伝説」 La légende de la princesse Chûjô-hime

当麻寺の有名な曼荼羅は中将姫によって作られました。この伝説にはいくつもの異本がありますが、中将姫は747年に藤原豊成の娘として生まれました。子供が授からなかった彼女の母親は、観音菩薩に願いをかけてかなえられました。しかし中将姫が5歳の時に母は亡くなり、父親が再婚した継母からいじめを受けることになります。はじめは雲雀山に捨てられましたが、父親のもとに帰ると、当麻寺へ入ることを願い出ます。そこで彼女は、お経を読んで書き写すことに没頭します。763年に、法如という名前で正式に仏門に入り、曼荼羅を織ることを決意します。蓮の花の茎の繊維で糸を作り、たった一晩で横約4メートルの曼荼羅を織りあげます。29歳の春、阿弥陀如来が、彼女を探しにこの世界に降りてきて、彼女を西方浄土へと導きます。

※「観音」「観世音」は、サンスクリットのアヴァローキテーシュヴァラの漢訳で、「この世の音を観測する者」というのが、文字通りの意味です。それが「人々の声・願いを聞く者」そして「願いをかなえてくれる者」と解釈されています。

(ピエール・レニエ)

Le célèbre mandala du temple Taima-dera aurait été réalisé par la princesse Chûjô-hime. Il existe plusieurs variantes de cette légende, mais elle serait née en 747 et serait la fille de Fujiwara no Toyonari. Ne parvenant pas à avoir d'enfants, sa mère aurait adressé un vœu au bodhisattva Kannon* qui l'aurait ainsi exaucé. Mais à 5 ans, la princesse perd sa mère et devient le souffre-douleur de la nouvelle épouse de son père. Elle est dans un premier temps abandonnée sur le Mont Hibari mais elle retourne chez son père et lui demande à être envoyée au temple Taima-dera. Là, elle se consacre à la récitation et à la copie de sûtras. En 763,



中将姫絵伝 (中之坊霊宝館)

elle devient officiellement nonne sous le nom de Hônyo et décide de tisser un mandala. Elle fabrique alors des fils avec des fibres de tiges de fleurs de lotus et, en une seule nuit, tisse un mandala d'environ 4 mètres de côté. Au printemps de ses 29 ans, l'Ainsi-venu Amida descend en ce monde pour venir la chercher et la conduire en sa Terre Pure de l'Ouest...

* Kannon 観音 ou Kanzeon 観世音 est la traduction sino-japonaise du sanskrit Avalokiteśvara et signifie littéralement « Qui observe les sons du monde », interprété par « Qui écoute les voix/les vœux des gens » et donc « Qui exauce les vœux »

(Pierre Régner)

ガイドクラブからのお知らせ 今年度は、奈良県葛城市の「当麻寺」について、フランス語で紹介できるようになることが目標です。9月24日(土)に勉強会、10月15日(土)に当麻寺散策を予定しています。両日も昨年同様ピエール・レニエさんを講師に迎えます。9月の勉強会では、内容が少し専門的すぎたという昨年度の反省点をふまえ、当麻寺に関することだけではなく、簡単なフランス語会話のなかで、自分自身の住む町や訪問先の紹介をする実践練習もできればと考えております。詳細は次号 Mon Nara にて。

フランス・ワインの紹介 (2) 「シャトー・ル・コーヌ 《ル・モナーク》」

多くの銘醸地を持つフランスの中で、ブルゴーニュ地方と並んで人気の高いボルドー地方。ブルゴーニュ地方の赤ワインは、ピノ・ノワール種というブドウのみで単一品種によって造られるのに対して、ボルドー地方の赤ワインは複数のブドウ品種をブレンドして造られるのが一般的です。その主要なブドウ品種となりますのがカベルネ・ソーヴィニヨン種とメルロ種の2つのブドウ品種で、ボルドー地方の中でも地区によってどちらのブドウがメインとなるかが変わってきます。

ボルドーの中心を流れるジロンド河の左岸に位置する、メドック地区やグラヴ地区は、有名な小説にも登場した「シャトー・マルゴー」や毎年著名画家がラベルをデザインすることで知られる「ムートン・ロートシルト」という超有名な赤ワインを数多く産出しています。左岸は砂利質の水はけが良い土壌が特徴で、土壌に適したカベルネ・ソーヴィニヨン種が主体となり造られています。世界遺産にも指定されている「サン・テミリオン」やボルドーでも最も高価なワインとして有名な「シャトー・ペトリュス」のあるボムロール地区などのある右岸では、粘土石灰質や粘土質の土壌に適したメルロ種が主体となります。

「シャトー・ル・コーヌ」は右岸に位置するブライ地区にあるシャトーです。17世紀からの歴史を持ちルイ14世も愛飲したと言われる王家御用達シャトーという輝かしい歴史を持ったシャトーです。メルロ種75%、カベルネ・ソーヴィニヨン種15%他から2010年という素晴らしい当り年となった年に造りだされた、芳醇で滑らか、豊かな果実味を持ち、しっかりと飲み応えと旨みを持った味わいです。近年価格の高騰が著しく、コスト・パフォーマンスの良いワインをみつけることがとても難しくなっているボルドー地方において希少な、お手頃価格で良質なボルドーを味わうことができる、大変お値打ちなワインです。

(法人会員 竹中 宣人)



Chateau Le Cone
"Le Monarque" 2010

Recette des «Courgettes farcies au fromage de chèvre et aux amandes»

「ズッキーニのヤギのチーズとアーモンド詰め」

今回は、パリ在住会員のピエール・シルヴェストリさんがルーアンに住むお母さんから教えてもらったという「ズッキーニのヤギのチーズとアーモンド詰め」のレシピを紹介します。ピエールさんからは、この料理をぜひ実際に作って賞味してみてくださいとのメッセージをいただきました。(編集部)

Temps de préparation : 15 minutes 準備時間 15 分

Temps de cuisson : 30 minutes 調理時間 30 分

Ingrédients (pour 3 personnes) : 材料 3 人分

- 4 courgettes rondes ou longues 丸く長いズッキーニ 4 本
- fromage de chèvre frais ヤギのチーズ
- amandes effilées スライス・アーモンド
- thym, sel et poivre タイム、塩、胡椒

Préparation de la recette :

- 1) Couper en deux les courgettes, et les évider. ズッキーニを縦二つに切って、中身をくりぬく。
- 2) Ébouillanter les courgettes dans de l'eau bouillante (2-3 mn). ズッキーニを沸騰したお湯で2、3分湯通しする。
- 3) Disposer les moitiés de courgettes dans un plat à gratin huilé. 油を塗ったグラタン皿にズッキーニの半分を並べる。
- 4) Fourrer les courgettes de fromage de chèvre, puis parsemer d'amandes effilées.

ヤギのチーズをズッキーニに詰め、スライスアーモンドを振りかける。

- 5) Saupoudrer de thym, de sel et de poivre. タイム・塩・胡椒をまぶす。

- 6) Mettre au four (200 degrés) pendant 20 ou 25 mn. 200 度のオーブンで20～25分ほど焼く。

Remarque : Servir par exemple avec du riz. 参考：例えばライスと一緒に召し上がれ。



フランス紀行（奇行・危行）2015

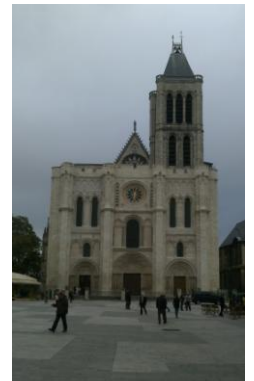
上野 公嗣（うえの まさつぐ）

念願の勤続 25 周年記念旅行先として、当初は夏スキーのためにニュージーランド方面と考えていましたが、諸般の事情によりフランスに決めました。第一に学習中のフランス語レベルの確認、第二にノストラダミウスの予言とジャンヌダルクに関する場所などの見学を目的にして、言葉が通じるかどうか分からない状況の中での自分へのミッションとして、出発前に以下のような概略行動予定を立ててみました。

初日：シャルルドゴール空港近くの F1 ホテルに投宿。
 2 日目：フランス王の戴冠式が行われた栄光の町ランスとジャンヌ・ダルクの生誕・成長の地ドンレミー村の見学。
 3 日目：サン＝ドニ（パリ有数の危険区域らしい）の大聖堂(Basilique de Saint-Denis)にて王家の墓見学（特にルイ 17 世）。知人の経営するモンパルナスのブラスリーで昼食、その後パリ見学（とはいえ凱旋門界限限定）。
 4 日目：ルーアン見学、そこからレンタカーにてポワティエ方面へ移動。
 5 日目以降：ポワティエ見学～アングレーム見学～トゥールーズ見学～カルカッソンヌ（ミディ運河）見学～モンプリエ見学～リヨン見学～ というザックリした予定のみ。
 9 日目：パリか空港近くに投宿。 10 日目：フランス出国

いざ着いてみると、はじめの空港・ホテル・焼肉店でフランス語が通じず、初日で完全に自信消滅。2 日目は、朝 7 時半にランス行きの TGV を予約するも 10 時半発で 3 時間もの待ち…。これよりも早く着く SNCF（フランス国鉄）の列車もなく、ドンレミー村の見学は諦めた。3 日目のサン＝ドニ大聖堂では開場待ち 2 時間の末、墓に眠るルイ 17 世と面談。他にも有名な歴代の王が多く葬られていた。パリの凱旋門の周りは、巨大なロンボワン（ロータリー）となっていることを知った（ちなみに、私の生まれた泉南市には 50 年以上前からロンボワンらしきものがある）。お目当てのカンプロンヌ將軍（ナポレオンの右腕）の像は探すも見つけられなかった。4 日目のジャンヌ終焉の地ルーアンでは、ジャンヌダルク教会で記録に忠実だが異様に高い十字架に違和感を感じながらも、ジャンヌダルク橋とジャンヌダルクの塔の内部見学ができた。駅でレンタカー店を探すも見つけられず、列車でポワティエを目指した。

5 日目はまずポワティエ裁判所に行くが、荷物が大き過ぎて荷物検査もしてもらえず、預けることも出来ずに内部の見学を断念。駅前の AVIS でレンタカーを 5 日間借りてリヨンで乗り捨てるつもりが、ここに返却する必要があると言われ当初の計画を断念、アングレーム訪問用にレンタル期間を短縮した。片道 1 時間程の道を迷いながら 4 時間かけて街にたどり着いたが、夕刻になり観光案内所も分からず、ポワティエに戻った。宿で前日に知り合った日本人大学院生に話しかけると、「こちらでの授業に支障があるので、日本語ではなく英語かフランス語をお願いします！」とのこと。私も出国時はそのつもりであったと反省、同時に諦めた行動予定の見直しをした！



サン＝ドニ大聖堂

ランス大聖堂前の
ジャンヌ乗馬像

6 日目は、アングレームに 1 時間強で到着し、観光案内所で宿を予約し旧市街内を見学。旧市街を散策すると高校が 4 つもあり学生もいたが、話を続ける自信が無く何も話しかけず「1999 年 7 月のその日に生まれた人はいるの？」（ノストラダミウスの予言）と人探しをしたかった。7 日目は、朝 8 時にトゥールーズへ出発、最短コースを選んだものの遠回りして夕刻到着。トゥールーズではミディ運河（ベルサイユに並ぶ建築物）の水門も見られず、さらに安宿の確保が出来ずに、初めて車中泊をした。

8 日目は、睡眠不足のまま 6 時半にモンプリエ入りしそのまま大学に行くと、最新のビルが並んでいた。付属図書館で医学部がピエール教会の隣にあることを教えてもらい向かった。凱旋門からの旧市街付近の美しさに圧倒された。医学部旧校舎の外観とエントランス内のみ見学、内部の見学をするには予約が必要、《予言の木》の見学は断念した。9 日目は、再度ポワティエ裁判所に行くも、前の広場でマルシェ開催のため非公開日となっており、審問の部屋はまたも見学できず。

以上が、私の初めてのフランス旅行の大まかな記録です。計画の立て方が不十分だったことと言葉が通じないために、見たいものの半分程しか見られませんでした。それでも、貴重な経験ができ、今後すべきことを認識できました。

（この旅行に興味をもたれた方からの連絡をお待ちしています。御所市今住 170 TEL:080-2400-0836）

会員紹介

奈良に来てよかった！

渡辺 夏代（わたなべ なつよ）

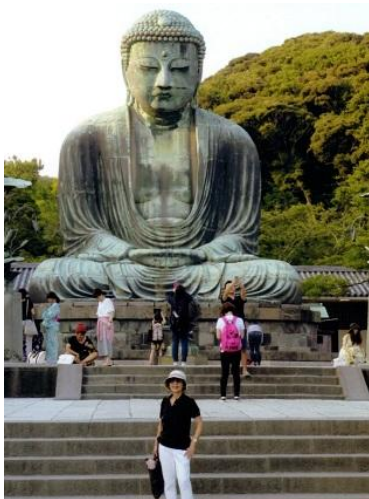
奈良に越して来て今年でちょうど 20 年になる。夫が亡くなり、落ち着いた頃はもう 3 年が過ぎていた。40 歳から始めた俳句の師・津田清子先生が奈良在住でもあり、迷わず奈良に決めた。

毎朝カーテンを開け、若草山を眺めて、一日が始まる。太陽と月は北から南へ、南から北へ少しずつ移動しながら、若草山から昇ってくる。そうして私の一年が過ぎてゆく。ひよんな事から始めた俳句ではあったが、子供

のいない淋しさも、夫の看病の時も、その後の独り暮らしも、俳句に没頭することで乗り越えられたと思っている。昨年、師は他界されたが、今は仲間数人との月 1〜2 回の句会で、侃侃諤諤と意見を言い合い楽しんでいる。時には、吟行（俳句を外で詠むこと）をすることもある。昨年は鎌倉に出かけた。（左写真）

昨年、奈良日仏協会に入会させてもらった。フランス語は喋れないしよくわからないが、絵が好きで、パリへはいちど、十年前にフリーで行った。ルーブル、オルセーはもちろん、ピカソ美術館やモロー美術館も素晴らしかった。今は、昔から好きだった映画鑑賞の楽しみが増えた。クロード・ルルーシュの「男と女」（1966）やエリザベス・テーラーが主演した「雨の朝巴里に死す」（1955）など、昔みたフランスを舞台にした映画を思い出す。これから、映画好きの虫が動き出しそうな予感がしている。

奈良に来て良かった！ としみじみ思っている昨今である。



大仏さんに見守られ

現代アートへの関心：映像・絵画・音楽のコラージュ 泉 荘太（いずみ そうた）

最初にフランスの文化に興味を持ったのは学生時代です。大学の指導教員で実験工房の活動をしていた山口勝弘先生が授業でヌーベル・ヴァーグの映像を紹介したり、日本の芸術にも詳しいフランス人のジル・クリストフ・シャルル先生が、海外の現代アートの最前線を紹介していました。

大学院では映像の複雑な効果を実験する研究をしていました。家族でプロヴァンス旅行に出かけたときは、セザンヌの立派なアトリエに驚かされました。しかし、家で「電子音楽」などを聴くうちに、そうした巨匠の絵画だけではなく、非定形な抽象絵画に興味を持つようになりました。その過程で、抽象絵画がパリ画壇の重要な位置を占めた時代のあったことを知りました。マルセル・デュシャンの相互レディ・メイドに触発をうけたアンディ・ウォーホルが開拓したポップ・アートは、イメージの流通が重要になる現代のデジタル社会を予見していました。ピカソなどの絵画におけるパピエ・コレ(papier collé) や写真におけるモンタージュの手法は、現代においてもますます重要性を帯びてきているように思われます。

一方、音楽にもコラージュ的な作品があります。各地の教会の鐘の音などをサンプリングし加工して制作したシャルル先生の「Undirected」という作品です。これは特殊なツールを用いて、イメージと音を自由に速度を変えてランダムに自動演奏することのできる CD-ROM でした。今年、そのシャルル先生のコンサートが関西であり、現代音楽の日本人アーティストたちとコラボレーションしていました。まさに「森に寄生し生きる菌類」のような音で（ウサギの頭の彫刻も展示されている！）、とても印象的でした。



気に入ったイラストをアレンジして、CG 漫画を制作してみました。

第 131 回 フランス・アラカルト「日仏交流の集い：室生在住のシャポールさん夫妻を迎えて」

- ❖ 日時：2016 年 7 月 7 日（木）15:00～17:00 ❖ 会費：会員 1000 円、一般 1500 円（飲み物付き）
 ❖ 会場：「菜宴」（奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F TEL: 0742-26-0835 近鉄奈良駅近く）
 ❖ 問い合わせと申込先：Nasai206@gmail.com tel & fax : 0743-74-0371（浅井）
 ❖ ゲスト：シルヴァン・シャポールさん（略歴）約 5 年前に日本人女性と結婚、5 年前から日本に住む。現在は宇陀市室生で、地元の食材を使ってフランスの郷土料理を出張販売する店 Méli-Mélo を営む。（Mon Nara 2015 年 11-12 月号の Nos amis francophones à Nara (4) の記事にて紹介）
 ❖ 当日はシャポールさんのご家族と来日されるフランスのご両親をお迎えします。シャポールさんには自分の好きなブルターニュの伝説と音楽、現在室生で営んでいるガレットとクレープの出張料理販売について紹介してもらう予定です。後半は、梨里香さんのシャンソン、シャポールさんの選んだブルトンの歌をその場で覚えながら唄い、フランス革命についての四方山話をするなどして、異文化についての理解を深めながら楽しみたいと思います。

**第 41 回 奈良日仏協会シネクラブ例会（6/26）案内** ★6 月 26 日（日）

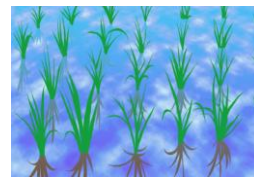
13:30～17:00 ★奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室にて ★プログラム：アラン・レネ監督『二十四時間の情事』（HIROSHIMA MON AMOUR, 1959 年, 90 分）★参加費：会員無料、一般 300 円 ★飲み会：例会終了後「味楽座」にて★問い合わせ：Nasai206@gmail.com（予約不要）
 ★「きみはヒロシマで何も見なかった、何も」「わたしはすべてを見た、すべてを」。脚本マルグリット＝デュラスによる会話とも独白ともつかぬ台詞が、男（岡田英次）と女（エマニュエル・リヴァ）の無機的な声で発せられる。「原爆」を経験した広島を舞台に、監督アラン・レネが現実と想像を織り交ぜて産み出した映像世界を、公開から 57 年を経た 2016 年のいま、存分に堪能しましょう！

**《2016 年度第 2 回理事会報告》…事務局**

日時：2016 年 5 月 19 日（木）15:00～16:00
 場所：放送大学奈良学習センター Z308
 出席者：三野、野島、井田、濱、中浦、中辻、高島、藤村、浅井、南城
 議題 1. 2016 年度 5 月の暫定会員 97 件。
 議題 2. 3/17 理事会後の活動：(4/10) 三重日仏協会と放送大学三重共催の文芸講演会に会長・事務局長参加。議題 3. 今後の行事 (5/29) 第 130 回アラカルト「ルノワールの映画『ゲームの規則』を語る」、(6/22, 29) 放送大学奈良と共催「登美南教養セミナー『星の王子さま』を読み解く」、(6/26) 第 41 回日仏シネクラブ例会『24 時間の情事』、(7/7) 第 131 回アラカルト「日仏交流の集い」、(9/24, 10/15) ガイドクラブ勉強会・当麻寺散策、(11/23) 秋の教養講座、「シャンパン」をテーマにした中浦理事の講演。議題 4. Mon Nara 次回理事会 7 月 21 日（木）15:00～16:30 放送大学奈良学習センター Z306 にて。

会員通信 ☒ ☒ ☒ ☒

- ★6 月 21 日（火）19:00「フランス語で歌うシャンソン」大阪俱樂部 4 階ホール、連絡先 06-69-22-65-02（中辻）
 ★7 月 1 日（金）19:00「三重日仏の音楽家たち」津リージョンプラザお城ホール、荒木まどかハープ出演、連絡先 080-4306-9613（荒木）
 ★7 月 10 日（日）17:00「関西ベートーヴェン協会主催・三木康子ピアノ演奏会」大東市住道駅前文化教室、連絡先 0742-61-8225（三木）
 ★7 月 31 日（日）13:00「ブエノスアイレスの風（魅惑のアルゼンチンタンゴ）」宇陀市ホワイエ・ヴェール 連絡先 090-8751-6408（藤村）
 ★8 月 20 日（土）14:00「奈良県ファインアーツコンサート」奈良文化会館国際ホール、ピアノ上田賀代子、連絡先 090-2193-3295（上田）
 ★9 月 3 日（土）18:30「ジョイントギターコンサート」橿原市ターネ・ザール・ホール、金谷幸三出演、連絡先 090-5967-1924（金谷）



par Sôta

編集後記 ☆ 6 月です。水をはった田んぼに植えられたばかりのイネ (riz) の緑色が鮮やかに目に入ります。昔から見なれた田園風景ですが懐かしい感じがします。★万葉集にイネを詠んだ歌がありました。「石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ」(7-1353) [石上 (いそのかみ) の布留 (ふる) の里の早稲田 (わさだ) に縄張りをするように、まだ穂の出ていない娘でも、占有のしるしの縄を曳いておいてください、大きくなるまで大切にしますから] ★場所は現在の天理市あたり。将来自分の娘を嫁にもらってほしいと願う女親が男におくった歌のようです。★フランスでは、南仏アルルで二つに分岐する大小のローヌ川河口の三角州地帯カマルグ (Camargue) に「水田」があります。★1998 年の冬、マリア伝説で名高いサント・マリー・ド・ラ・メール (Saintes-Maries-de-la-Mer) の教会を訪れた時にカマルグの湿原を通りました。いつか田植後の時期に訪れ、フランスの水田風景を眺めてみたいものです。（N. Asai）

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
 ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は **7 月 20 日**が原稿締切日です。

Mon Nara mai-juin 2016 **5-6 月**合併号 numéro275

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴〔郵便物のみ〕発行責任者：三野博司